



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

四旬節第1主日B年(2021年2月21日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 9章18－15節

第二朗読：使徒ペトロの手紙1 3章18－22節

福音朗読：マルコによる福音書 1章12－15節

## 今日のテーマ：<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>荒れ野とはどこか？

三つの朗読から

第一朗読に「地を滅ぼすことは決してない」(11節)と神さまは仰います。しかも、その約束のしるしとして神さまは「虹を置」(13節)きます。神さまは「虹」を見るたびに、人間と立てた契約を思い起こします。滅ぼさない神さまは、新しい手だてで人間を救おうとし、そのことをいつも思い起こす。そんな方なのです。

第二朗読の「水の中を<sup>とお</sup>通って救われました」(21節)は興味深いです。水には二重の意味があります。モノを清めるという働きと、モノをのみ込むというどつもない悪魔的な働きという二重の意味です。清めと悪という二面性をイエスさまは取り去ります。復活したイエスさまによって獲得された新しい意味は、いのちの再生です。

福音朗読の「霊は……送り出した」(12節)。かつて契約のしるしとして虹を天空に<sup>あらわ</sup>現した神の霊は、人々を再生するために水の中を通らせます。そして、同じ神の霊がイエスさまを荒れ野へと導くのです。洗礼を受けたわたしたちもまた、神の霊と共にあって、この世の荒れ野へと導かれるのです。

説教

四旬節第一主日では毎年、イエスさまの荒れ野での試みの箇所が読まれます。今年はB年ですので、『マルコによる福音書』から読まれます。その記述は単純です。

12節にある「荒れ野に送り出した」の「送り出す」はエクバローですが、『マルコによる福音書』では16回使われ、そのうちの12回は悪霊を「追い出す」の意味で使われます。残りの

4回は「追放する」の意味で使われます。福音書の作者はこの動詞に強い意味をこめていて想像できます。また、13節の「誘惑を受けられた」はギリシア語でペイラゾーといいます。もともとは「何かをしようと試み、努力する」の意味ですが、次第に宗教的なニュアンスが加わって「試みる」の意味へとなりました。今日の福音の箇所では、サタンが「罪へと誘う」という意味で使われています。どのように罪へと誘ったか、その試みの手段については『マルコによる福音書』はなにも語りません。そして、「仕えていた」は動詞の形が未完了というものです。過去における継続的な動作を表します。ですから、天使がイエスさまに仕えていたのは、サタンとの争いと対決が終わってからではなく、四十日間続いた対決の間、ずっと仕えていたことを意味します。

四十日間、イエスさまは天使たちの世話を受けつつ、その一方でサタンと野獣たちと争ったこととなります。イエスさまを守ろうとする側と、イエスさまを滅ぼそうとする側の熾烈な闘いがあったのです。

福音書の作者にとって、荒れ野とは神的な力（霊、天使）と、悪魔的な力（サタン、野獣）が共存している場所です。そういった点で荒れ野とは、現代のわたしたちが生きている現実の世界を象徴しているのだと思います。日常の生活を送る場面の一つひとつが荒れ野です。聖霊はわたしたちをそこへといざないます。もちろん、悪魔的な力に負けそうになりますが、それでも天使が仕えてくれていると信じて困難な毎日を送っていきましょう。

## 十字架上の七つの言葉（別刷りのカード参照） 1

「父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分が何をしているのか分らないのです」  
（ルカ23章34節）

### 【ミニ黙想】

四旬節の間、イエスさまの十字架上で言葉を味わい、黙想しましょう。

イエスさまは人々から侮辱を受けている間も、彼らを赦そうとなさいます。苦しみの中にあってもイエスさまの心は閉じてはいません。人間と天の御父に向かって開かれています。